

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 18 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22401026

研究課題名(和文) 変容するエチオピア諸言語の静態と動態に関する総合的研究，ならびにデータベース構築

研究課題名(英文) Comprehensive Study on the static and dynamic aspects of the Ethiopian Languages and the Construction of the Database using GIS

研究代表者

柘植 洋一 (TSUGE, YOICHI)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：50092276

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,100,000円、(間接経費) 4,230,000円

研究成果の概要(和文)：研究が余り進んでいないエチオピアのオモ系，クシ系，ナイル・サハラ系の諸言語を対象にして，それら言語の言語学的な記述を進めるとともに，大きく変容しつつある現代において言語もどのように変わりつつあるかを明らかにしようとするを主眼に，現地調査を行ってその実態を明らかにした。後者については特に文字化の過程に焦点をあてて調査・研究を行った。また，得られたデータをGISを使ったデータベースに組み込むことにより，基礎的なデータの蓄積を行い研究の基盤を提供するだけでなく，他の研究者も利用できる体制を整えることにより，類型論的な研究などにも貢献できることになった。

研究成果の概要(英文)：There were two objectives in this project. The first objective is to make it clear the static and dynamic aspects of the Omotic, Cushitic and Nilo-Saharan languages of Ethiopia. The second is to construct the database of these languages using GIS. We have succeeded in collecting basic linguistic information of the several languages and made surveys on the socio-linguistic aspect, especially the problem of the introduction of the writing system. Along with these works we have developed our database system and made it more usable for other linguists not only who are eager to know about the linguistic structures of those languages but also who are interested in the linguistic typology.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

 キーワード：エチオピアの諸言語 クシ系・オモ系諸語 ナイル・サハラ諸語 GIS 少数言語 文字化 言語動態
国際研究者交流(エチオピア)

1. 研究開始当初の背景

平成13年度より研究代表者を中心としたグループは、科学研究費補助金「多言語国家エチオピアにおける少数言語の記述、ならびに言語接触に関する調査研究」基盤研究(B)(1)(課題番号13571039)と「オモ・クシ系少数言語の調査研究及び地理情報システムを用いたデータベース構築」基盤研究(B)(課題番号16401008, 19401023)を受けて、エチオピア諸言語の中でとりわけ研究が遅れており、また早急に調査が必要とされるオモ・クシ系の少数言語の記述研究を行ってきた。

メンバーは毎年現地調査を行い、南オモ系のアリ語、ハマル語、パンナ語、ディメ語、北オモ系のバスケット語、マロ語、ガンジュレ語、ガンタ語、ベンチュ語、東クシ系のコンソ語、中央クシ系のアガウ語、ハムタンガ語の基礎データの収集し成果を発表する一方、GIS(地理情報システム)を用いたエチオピアのデジタル言語地図を作製し、集められたデータをウェブ上で閲覧できるシステムを開発し、山口大学のサーバ上に公開し、改良を重ねてきた。また、社会言語学的な側面にも着目し、言語交替、言語教育、文字化に関して、いくつかの調査研究を行ってきた。

しかし、その研究過程で以下の疑問点が出てきたので、本研究でその解明を目指した。一つは、一人の研究者が現地調査で集められる言語データには限界があり、80を越える言語が話されている多言語国家エチオピア全体像を捉えることが難しい点である。そのため、現在のデータベースの量では、デジタル言語地図の検索機能を十分発揮させていない。もう一つは、「何のために」、また「誰のために」少数言語の記述調査をしているのか、という疑問である。エチオピア人は我々が取るに足らない少数言語の記述調査を見て訝しがり、疑問を投げかける。また、我々が調査対象にしている少数言語話者自身も積極的に文字を持つとする意識もなければ、また次世代への言語交替が起こることに関しても比較的寛容である。エチオピアの人口は急激に増加をしていて、それは都市部だけでなく地方でも同じで、ほとんどの少数言語は、他大陸に見られるような危機言語の状態にあるとは言えない。それでもエチオピアの作業語であるアムハラ語の普及率は高まり、少数言語の必要性はますます低くなっており、このような状況に直面し、エチオピアの諸言語間の関わりの実勢を明らかにし、その様相を解明することが求められている。

本研究は、このような疑問を出発点にして、エチオピアの少数言語のあり方を、静態面と動態面からのアプローチによって明らかにしようとしたものである。

2. 研究の目的

本研究は、エチオピア諸言語を静態面と動態面からアプローチすることを目的とする。

(1) 静態面：研究が進んでいない少数言語に関しては、現地調査を実施して基礎的なデータを収集する。一方、文献資料を整理し、エチオピア諸言語の包括的なデータを集約し、データベースの中に流し込み、GIS(地理情報システム)を用いたウェブ上のデジタル言語地図で属性検索できるシステムを提供し、言語類型地理論的研究に貢献する。

(2) 動態面：個別言語内での文字化の動き、また言語接触の中での言語使用状況にみられる動きを調べることで、多言語国家が抱える「言語の共生」、「言語接触状況」、「教育やメディアにおける言語使用」、「少数言語の入門書や会話集の必要性」について、調査研究を行う。

3. 研究の方法

(1) 静態面

今までメンバーが取り組んできた少数言語の語彙、音声、文法の記述調査を引き続きおこなって基礎データを収集に努め、対象言語もこれまでより拡大し、ナイル・サハラ系およびセム系の言語にも目を向ける。また、これまでアジス・アベバ大学のエチオピア学研究所、言語学科、言語センターのスタッフと友好な関係を築き、報告書にも寄稿いただいていた。そこで今回は一層緊密な協力体制を構築し、具体的な共同研究を実現する。また日本に招聘することで、さらなる信頼関係を築くことに繋げていく。

メンバーの現地調査だけでは言語データの収集が限られているので、今回積極的に文献データを整理し、データベースに入れていき、エチオピア諸言語の全体像を捉えられるようなデータベースの構築を目指す。これは眠っている貴重な文献データを利用可能な状態にすることに繋がる。

多くの言語データが揃うことで、現在稼働中のGIS(地理情報システム)を用いたウェブ上のデジタル言語地図で行える属性検索システムが有効に活用されることになる。

(2) 動態面

少数言語の現状を社会言語学的な観点から研究することが目的であるが、少数言語の置かれている状態をどう捉えるかは、これまでの調査結果から、言語によって、また個人によって、かなり異なることがわかった。そこで、本研究では、単に表面的なアンケート調査を実施するのではなく、話者人口の規模、言語接触の度合い、アムハラ文字の識字率、文字化の動き、作業語であるアムハラ語の役割、地域有力語の存在、文字表記の方法、といった考えられうる要因を調査前にメンバーで精査し、できる限り一般的な結論を導けるように努める。

もし少数言語話者自身が文字、文法書、辞書を必要とした場合、あるいは、その言語の話されている地域に関心の持つ人たちがいた場合、単に言語研究を目的とするだけに留まらず、彼らが利用できる言語の入門書や

会話集を作ることが言語学者の重要な社会貢献であると考えるので、そのような仕事を期間内に行う。

4. 研究成果

(1) 具体的には、これまでのデータに加えて、アリ語、バスケット語、アッレ語、コウエグ語、ディメ語、ニャンガトム語、アムハラ語、マスカン語、トビ語、ハマル語についての多くのデータを収集することが出来た。特にこれまでに報告がほとんどないアッレ語やコウエグ語のデータを得られたのは意味深いものである。

こうしたまだ十分研究されていない言語の記述研究は、あらゆる言語研究にとって必要不可欠なことであるが、特にエチオピアの場合、いくつもの異なる語族、語派に属する言語が一つの「エチオピア言語圏」とも呼ぶべきまとまりを作っている。本研究によってより多くのデータを蓄積することが可能となり、その実態の解明に貢献するところが大きい。また、収集した言語データは、データベースに蓄積して一般に公開するので、言語研究の進展に寄与することになる。

なお、現地調査をスムーズに行う上でエチオピア人研究者の協力は不可欠である。こうした協力を緊密にするために、2年間に計3名のエチオピア人研究者を日本に招いてより密接に研究計画を検討することが出来た。これは今後の研究の進展に大いに寄与するものである。

(2) GISサーバについては、検索システムを更に改良し、web上で検索が行えるシステムをほぼ完成した。内容面での充実を図るために本研究によって得られた各言語のデータおよびこれまで発表されたデータを順次取り込み、今後も更に内容を充実させていく。このシステムを活用することによって様々な言語特徴の相関についても容易に検索が行えるようになった。

GISを用いたデジタル言語地図は、言語類型地理論的研究にとって極めて強力な道具となり、新たな知見を得る可能性が大きい。本研究はエチオピアに限定しているけれども、デジタル言語地図さえ用意すれば、世界のあらゆる言語研究に適用可能で、汎用性が高い。さらに、ウェブ上での属性検索機能は、使い勝手が簡単で、ArcGISソフトの複雑な操作を覚えることなく、利用者はURLにアクセスできるだけで、極めて複雑な検索結果を容易に手に入れることが可能となる。

(3) 動態面では特に文字化に焦点をあてて、調査研究を行った。対象はアリ語とバスケット語である。特にバスケット語については、文字化支援テキストならびに入門書の作成(母語話者のためのバスケット語教材として、絵付き文字テキスト及び教師用注詳)を行い、バスケットの3つの小学校に配布した。これはこれまでの研究成果を当該言語話者に還元するという重要な意味を持つものである。こうし

て、エチオピアにおける少数言語の状況を動態的に捉えることは、世界の他の同じような言語密集地域の研究にとっても重要な示唆を与えるものである。

(4) こうした研究成果の発表の場として、新たに電子ジャーナル Studies in Ethiopian Languages を発刊した。これは日本人研究者だけではなく、広く世界の研究者特にエチオピア人研究者にも共同研究の成果を発表の場を提供しようとするものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計14件)

乾秀行, バスケット語テキスト, Studies in Ethiopian Languages Vol.3, 査読有, 2014, 1-23

乾秀行, コウエグ語の文法スケッチ, Studies in Ethiopian Languages Vol.3, 査読有, 2014, 24-49

池田潤, アジス・アベバ大学における文献調査報告, Studies in Ethiopian Languages Vol.2, 査読有, 2013, 1-8

乾秀行, コウエグ語名詞 500, Studies in Ethiopian Languages Vol.2, 査読有, 2013, 9-28

乾秀行, コウエグ語形容詞, Studies in Ethiopian Languages Vol.2, 査読有, 2013, 29-38

池田潤, アジス・アベバ大学における文献調査報告, Studies in Ethiopian Languages Vol.1, 査読有, 2012, 32-47

乾秀行, エチオピア言語調査用基本動詞例文集, Studies in Ethiopian Languages Vol.1, 査読有, 2012, 48-211

柘植洋一, アリ語識字用テキスト訳注(1), Studies in Ethiopian Languages Vol.1, 査読有, 2012, 227-260

乾秀行, コウエグ語の音素目録 - ガルギダ方言 - (The phoneme inventory of the Galgida dialect of Kowegu), 一般言語学論叢 14, 査読有, 2011, 41-64

乾秀行, バスケット語名詞 500, Cushitic-Omotc Studies 2010, 査読無, 2011, 9-29

乾秀行, バスケット語の文字化の確立に向けて, Cushitic-Omotc Studies 2010, 査読無 2011, 31-68

乾秀行, コウエグ語の試験調査報告, Cushitic-Omotc Studies 2010, 査読無, 2011, 69-89

小脇光男, コンソ語の親族名称に関する覚書, Cushitic-Omotc Studies 2010 査読無 2011, 107-109

柘植洋一, アリ語, パンナ語の文字化資料とその表記方法について, Cushitic-Omotc Studies 2010, 査読無, 2011, 139-153

〔学会発表〕(計 1 件)

乾秀行, GIS を用いたエチオピア諸言語のデータベース, 第 21 回日本ナイル・エチオピア学会学術大会, 2012 年 4 月 22 日, 長崎大学 (長崎県)

〔図書〕(計 4 件)

乾秀行 『母語話者のためのバスケット語教材 (Baskeetitts mats'aafa-Baskeeto asantsabo)文字編』(改訂) 9 ページ, 2014, 山口大学

乾秀行 『母語話者のためのバスケット語教材 (Baskeetitts mats'aafa-Baskeeto asantsabo)単語編』(改訂) 50 ページ, 2014, 山口大学

乾秀行 『母語話者のためのバスケット語教材 (Baskeetitts mats'aafa-Baskeeto asantsabo)文法編』 25 ページ, 2014, 山口大学

柘植洋一, 乾秀行 (編) 『Cushitic-Omotiic Studies, 2010』 177 ページ, 2011, 山口大学

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

Studies in Ethiopian Languages(電子ジャーナル):

<http://ds22n.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~abesha/SEL/index.html>

GIS サーバ:

http://gis.hmt.yamaguchi-u.ac.jp/Web_Mapping_Application_Ethiopia/Mapselect.aspx

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柘植 洋一 (TSUGE YOICHI)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号: 50092276

(2) 研究分担者

乾 秀行 (INUI HIDEYUKI)

山口大学・人文学部・准教授

研究者番号: 10241754

小脇 光男 (KOWAKI MITSUO)

熊本大学・国際化推進センター・名誉教授

研究者番号: 30136030

池田 潤 (IKEDA JUN)

筑波大学・人文社会科学研究所(系)・教授

研究者番号: 60288850

(3) 連携研究者

なし